様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月１５日現在

機関番号：82619
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2008～2010
課題番号：20320026
研究課題名（和文）　東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に―

研究課題名（英文）　Study of Shosoin-related materials in the Tokyo National Museum collection with a focus on *Shosoin-gire* textile

研究代表者
澤田　むつ代（SAWADA　MUTSUYO）
独立行政法人　国立文化財機構　東京国立博物館　特任研究員
研究者番号：40215918

研究成果の概要（和文）：
東京国立博物館が所蔵する「正倉院頒布裂」を中心に、正倉院関係の「裂帖」、模写と模織、さらに正倉院関連資料について、研究成果報告書を制作した。これには各作品の名称、素材、技法、用途等の基本情報に加え、織物では文丈、窠間幅を、染物にあっては文様一単位の寸法も付して作品本体を立体的、かつ詳細に掲示した。各作品については、染織品の微妙な色合いを重視して、カラーで掲載した。これらの公開は今後の正倉院裂研究には欠かせぬものとなる。

研究成果の概要（英文）：
Focusing on the “Shosoin textiles” from the Shosoin Treasure House presently in the Tokyo National Museum collection, two thematic exhibitions with accompanying catalogues were held to introduce albums of fabric specimens, sketches and reproductions. The research report contained a detailed and multifaceted description of the works, recording details of designs such as the length and width of design motifs as well as measurements of pattern sets in addition to basic information such as names, methods and uses. The photographs in the exhibition catalogues were printed in color to illuminate the subtle shades of the individual works. The release of this information will prove invaluable for the future study of Shosoin textiles.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
２００９年度	2,300,000	690,000	2,990,000
２０１０年度	1,800,000	540,000	2,340,000
総　計	7,900,000	2,370,000	10,270,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：上代裂

１．研究開始当初の背景

現在、正倉院宝物は宮内庁の管理のもと、年に一回期間限定で、奈良国立博物館にて「正倉院展」と称して数十点ずつ一般に公開されている。正倉院展は昭和 21 年(1946)の初回開催は約 15 万人の入場者数を数え、その後、落ち込む年もあったものの、昭和 47 年(1972)以降はずっと 10 万人を超えている。正倉院展を報道する新聞やテレビでは、連日、展示室の人だかりがみられる。それというの

も、正倉院宝物が貴重で、普段はなかなかみられないものとして認識されているからこそ、短期間にもかかわらず 10 万人以上の観客を集めるのである。

その正倉院に関する研究はやはり、数限りないほど行なわれてきた。本研究の代表者である澤田むつ代も、東京国立博物館(以下、東博)の調査員・研究員として、上代裂(飛鳥・奈良時代の染織品で、法隆寺に伝来した染織品の法隆寺裂と正倉院所蔵の染織品である正倉院裂等が含まれる)に関する調査研究と修理を長い期間行なっており、その研究成果を東京国立博物館発行の研究誌『MUSEUM』に 23 回報告してきた。昭和 63 年(1988)には『日本の美術 263 染織(原始・古代)』(至文堂)をまとめ、平成 9 年(1997)には東京国立博物館紀要で、「正倉院頒布裂」を発表した。また、上代裂に関する研究成果をまとめ、『上代裂集成』(中央公論美術出版、平成 13 年・2001)を出版、博士論文として提出し、上代裂を研究する上では基本文献とされるようになった(たとえば尾形充彦『日本の美術 441　正倉院の綾』(至文堂、平成 15 年・2003)など。

澤田が「正倉院頒布裂」で報告したように、明治 10 年(1877)頃、正倉院から博物館へ正倉院裂の頒布が行われた。東博が現在所蔵する正倉院頒布裂は 266 点であるが、それ以外にも正倉院伝来とされる染織品を所蔵している。奥村秀雄の「東京国立博物館保管　上代裂について(上)」(『MUSEUM』389 号、昭和 58 年・1983)によると、頒布裂を含む上代裂の総数は、裂帖 4 帖、ガラス挟み 408 枚、台紙貼等(一部法隆寺裂を含む)で、計約 1,300 点あまりである。澤田は、このうち頒布裂に関して詳細なデータを発表しており、正倉院裂を紹介する図録(たとえば松本包夫『正倉院裂と飛鳥天平の染織』紫紅社、昭和 59 年・1984)でも、一部紹介されてきた。しかし、東京国立博物館が所蔵する正倉院裂の全体像は、これまでほとんど公開されていない。本研究では東博が所蔵する正倉院裂全体を調査し、データを収集・公開、写真撮影も行ない、全体を示す図版目録を制作することを第一の目標とする。

２．研究の目的

（1）

これまで一部しか研究、公開されてこなかった東博が所蔵する上記の 1,300 点あまりの正倉院裂は、正倉院以外で保管する正倉院裂として特異な存在である。これらの全体的なデータを収集し、公開するのが目的である。

①正倉院裂に関しては正倉院から配布された正倉院頒布裂、ガラス挟み裂、台紙貼裂、裂帖等を詳細に調査し、作品本体にかかわる基礎的なデータの収集と写真撮影を行ない、正倉院裂関係の全体的な把握につとめる。

②正倉院裂関係の模写、模造、織物の文様を復元した模織作品等を調査し、データの収集と写真撮影を行なう。

（2）

東博には正倉院裂以外にも、明治時代以降の正倉院に関係する資料や、正倉院宝物(染織品以外)の模写、模造が多数保管されている。それらの資料と、他機関が保管する関係資料の調査も行なう。

①東博は明治 5 年(1872)の正倉院開封から、正倉院が内務省から宮内省へ移管になったあと、明治 19 年(1886)には博物館も宮内省の管轄となった。さらに、明治 41 年(1908)には、正倉院が帝室博物館の所管となり、東京帝室博物館(現東博)には正倉院宝庫掛が置かれ、昭和 22 年(1947)に博物館が宮内省の管理でなくなるまで、正倉院宝物の管理に深く関わってきた。このため、正倉院関係の資料が多く遺されている。

②東博が所蔵する正倉院に関係する資料を調査・研究することで、1,300 点もの正倉院裂等が東博へ入ってきた経緯を明らかにすることができる。

③明治以降の正倉院の管理に関わってきた東博の資料を総合的に研究することで、正倉院宝物の評価の歴史を明らかにできる。

３．研究の方法

（1）

東博が所蔵する正倉院裂の調査・データ収集。

①東博には、上記のように 1,300 点あまりの上代裂(一部法隆寺裂を含む)が保管されている。それらすべての上代裂に関して、名称をはじめ、法量、素材、技法、文様、染色、現状、用途等といった作品本体に関する詳細なデータを調査し、記録する。これらの作業は研究代表者の澤田むつ代が担当する。それと平行して外部のカメラマンによる写真撮影(デジタルカメラ)も行なう。作品によっては織物組織の拡大撮影も行なう。

②東博が所蔵する正倉院裂関係の模写、模造、模織作品等について、収蔵の経緯などを調査するとともに、個々の作品については、名称、作者、製作年代、正倉院裂のどの宝物に相当するかを調査し、データの収集を行なう。これらの作業も研究代表者の澤田むつ代が担当する。それと平行して外部カメラマンによる写真撮影(デジタルカメラ)を行なう。

（２）

東博が所蔵する正倉院関係資料の把握

①東博はその草創期から現在に至るまで、正倉院に関わるさまざまな資料を保管している。例えば明治５年(1872)の正倉院開封に関する調査の資料(重要文化財・壬申検査宝物図集)や調査の際に採集したと思われる拓本等から、明治 16 年(1883)に、年に一度の曝涼がはじまってからの記録等さまざまな資料が遺されている。どのような種類のものがどれだけあるのかを確認することを先決とする。この作業には研究分担者の高橋裕次が、これまで東博に於いて本館 16 室で歴史資料の展示を担当してきており、正倉院関係の資料の展示も行なってきている。研究分担者・高橋を中心に、同じく歴史資料の展示の元担当者であった研究分担者・丸山士郎と、正倉院宝物等の模写模造の特別展に関わった研究分担者・浅見龍介が協力して行なう。

②東博が所蔵する正倉院宝物に関する古写真(鶏卵紙、ガラス乾板等)については研究分担者の丸山が行なう。

③正倉院宝物の染織品に関して東博が出版した『御物上代染織文』や東博が昭和 15 年(1940)、同 24 年(1949)、同 34 年(1959)、同 56 年(1981)の４回行なった展覧会に関する図録や記録、公文書等の資料の収集については研究代表者の澤田をはじめ、研究分担者の高橋、丸山、浅見が協力して行なう。

（３）

東博他で所蔵する正倉院関係資料の全体像を把握する。

①奈良国立博物館(以下、奈良博)においては、その歴史においても正倉院との関連が深く、昭和 21 年(1946)以来、毎年正倉院展を開催しているため、正倉院展に関わる資料や公文書等の資料の把握を行なう。主に研究分担者である奈良博の西山厚を中心に行ない、東博の研究分担者も協力して作業にあたる。

４．研究成果

（１）

東博所蔵の正倉院裂の詳細なデータを盛り込んだ図録を制作(研究代表者・澤田、研究分担者・西山担当)。

これまでほとんど公開されてこなかった東博が所蔵する正倉院裂について、各作品は染織品の微妙な色合いを重要視してカラーで掲載するように務め、あわせて詳細なデータを掲載した図録を制作した。

①各作品のデータについては、名称、素材、技法、用途等の情報とともに、織物技法としての文丈、窠間幅を、染物技法には文様一単位の寸法も付して作品本体を立体的に、かつ詳細に掲示した。これらの公開は今後の正倉院裂研究にとって欠かせぬものになると確信する。なお、紙面の都合で、「裂帖」と模織に置いては詳細なデータを盛り込むことができなかった(澤田担当)。

②正倉院裂は大形の作品は無いものの、服飾品の一つである襪、聖武天皇一周忌に用いられた道場幡の幡足下方に飾られた垂端飾、天蓋の垂飾といった形状をとどめている作品もあるが、多くが残欠となる。これらの残欠でも、類裂が正倉院の何に使われているかを見極めることにより、文様の復元や用途等も類推することができるため、残欠とはえ資料的価値は極めて高い。

本文の後に正倉院頒布裂と裂帖にみられる染織品の類裂が、正倉院宝物の何に用いられており、何時のものかを明らかにした表を掲載した(澤田担当)。

③巻末には昭和 15 年 11 に東京帝室博物館(現東博)で開催された「正倉院御物特別展」の盛況ぶりを描いた「くちなわ物語」についての報告を掲載した(西山担当)。

（２）

東博が所蔵する 1,300 点あまりの正倉院裂については、大量であることから、台紙貼については調査と写真撮影が終了していない作品が多い。しかし、正倉院頒布裂とガラス挟み裂、裂帖、模写、模織については、その多くを調査し、写真撮影を終了することができた。

東博が所蔵する壬申検査等の正倉院関係資料、ガラス乾板等の古写真、東博が出版した『御物上代染織文』や東博で開催された「正倉院展」関係の資料や公文書等についても、ある程度把握することができた。さらに、奈良博の正倉院展に関する資料や公文書等の把握にも務めた。

（３）

調査した正倉院頒布裂を中心に、染織品の模造、模写、模織等をあわせて２度の特集陳列を行ない、一般に公開した。それとともに、毎回カラー図版による展覧会カタログを制作した（研究代表者・澤田担当)。

①第１回目は、平成 21 年 11 月 10 日～同年 12 月 10 日に開催し、期間中展示品の作品解説も行なった。
この特集陳列にあわせて『東京国立博物館所蔵 正倉院の織物』と題した展覧会カタログを制作した。

②第２回目は、平成 22 年 11 月２日～同年 11 月 28 日に開催し、第１回目同様、期間中展示品の作品解説も行なった。

この特集陳列にあわせて『東京国立博物館所蔵 正倉院の染物』と題した展覧会カタログを制作した。

（４）
研究成果の一部を国際シンポジウムで２度発表し、上代裂の情報公開に務めた(研究代表者・澤田担当)。
①１回目は「上代裂を守る」というテーマで、東博の大講堂で開催された。外国からは中国、アメリカ、イギリス、ベルギー、スイスの研究者、日本からは正倉院、大学、東博等の染織や修理、保存にかかわるそれぞれの研究者による発表が行なわれ、ワークショップでは染織品の展示、保存、修理について、さまざまな情報交換を行うことができた。
②２回目は韓国・国立扶余博物館で行なわれた「陵山里出土遺物」に関連したもので、日本における古墳出土の織物から法隆寺の織物について、陵山里出土の織物と素材、技法等を比較した発表を行なった。

（５）
正倉院宝物や正倉院裂について論文を発表した
①毎年奈良博で行なわれる正倉院展の図録で、「正倉院宝物の成立とその公開」について論文を執筆した(研究分担者:西山厚担当)。
②特別展『東大寺大仏―天平の至宝―』(2010、東京国立博物館)の図録において、年代の明らかな正倉院宝物の染織品のうち、錦については、大仏開眼供養会と聖武天皇一周忌の道場幡等に用いられている文様に明らかな違いが認められることについて執筆した(研究代表者：澤田担当)。
③②の同図録において、展示された「天平古裂」のうちの２点が、東博の正倉院頒布裂と元は一体として表裏背合わせになっていたことを明らかにした。さらに、東大寺に遺っている他の「天平古裂」も正倉院から頒布されたものと推測し、正倉院頒布裂の博物館以外に配布された実態をつかむことができた(研究代表者：澤田担当)。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
①西山厚「正倉院宝物とその公開(概説)」『第62回　正倉院展』奈良国立博物館、査読無、2010、pp６―12
②澤田むつ代「天平の染織」、特別展『東大寺大仏―天平の至宝―』東京国立博物館・読売新聞東京本社文化事業部、査読無、2010、pp180―186
③澤田むつ代「天平古裂は正倉院から配布された〈正倉院頒布裂〉」、特別展『東大寺大仏―天平の至宝―』東京国立博物館・読売新聞東京本社文化事業部、査読無、2010、pp135―141
④西山厚「正倉院宝物の成立とその公開」『第61回　正倉院展』奈良国立博物館、査読無、2009、pp6―12
⑤西山厚「昭和二十一年の〈正倉院特別展観〉」『正倉院展　六十回のあゆみ』、奈良国立博物館、査読無、2008、pp10―11、
⑥西山厚「正倉院宝物の成立とその公開」『第六十回　正倉院展』奈良国立博物館、査読無、2008、pp6―12

〔学会発表〕（計４件）
①澤田むつ代「藤ノ木古墳出土の織物から法隆寺の織物」国際シンポジウム「陵山里出土遺物」2010年10月22日、韓国・国立扶余博物館
②澤田むつ代「法隆寺の染織品」国際シンポジウム「上代裂をまもる」2009年12月20日、東京国立博物館・平成館・大講堂
③澤田むつ代「天平の美と技」正倉院フォーラム2009　福岡、2009年9月5日、アクロス福岡
④澤田むつ代「飛鳥・奈良時代のさまざまな染織技法」日本工芸会西部支部染織部会、2009年2月28日、九州国立博物館

〔図書〕（計４件）
①澤田むつ代、東京国立博物館『東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に―』(科学研究費補助金、研究成果報告書)共著、2011 年、182 頁、pp１―175
②西山厚、同上、pp176―182
③澤田むつ代、東京国立博物館『東京国立博物館所蔵　正倉院の染物』(特集陳列に於ける展覧会カタログ)単著、2010年、34頁
④澤田むつ代、東京国立博物館『東京国立博物館所蔵　正倉院の織物』(特集陳列に於ける展覧会カタログ)単著、2009年、34頁

６．研究組織
(1)研究代表者
澤田　むつ代（SAWADA MUTSUYO）
東京国立博物館　特任研究員
研究者番号：40215918

(2)研究分担者
高橋　裕次（TAKAHASHI YUJI）
東京国立博物館　学芸企画部　博物館情報課・課長

研究者番号：00356271
丸山　士郎（MARUYAMA　SHIRO）
東京国立博物館　学芸企画部　博物館教育課　教育講座室・室長
研究者番号：20249915
浅見　龍介（ASAMI　RYUSUKE）
東京国立博物館　学芸研究部　調査研究課　東洋室・室長
研究者番号：30270416
西山　厚（NISHIYAMA　ATSUSHI）
奈良国立博物館　学芸部・部長
研究者番号：10167570